

## EV開発で家電城下町から発信した 町工場の心意気

株式会社淀川製作所

(本社) 大阪府守口市八雲中町 1-13-6  
グループ従業員数 16人

ここ10年、大手工場の海外移転がすすみ、町工場に降りてくる仕事は大幅に減った。同業者の廃業や倒産が相次ぐなか、淀川製作所の小倉庸敬社長は、突然、EV（Electric Vehicle=電気自動車）をつくると宣言した。真っ赤な漆塗りのボディで、扉は扇型、まるで御所車のような純和風のデザインのEVは“Meguru”と名付けられた。その開発過程はテレビ局が密着取材して全国ネットで流し、単行本にまでなったから、俄然世間の注目を集め、小倉さんの毎日は、製品展示会や講演会などで多忙を極めている。何度かのアプローチの末、ようやく守口市の本社を訪ねる機会を得て、EV開発挑戦のいきさつを聞いた。

### ■下請けからの脱出をめざす

大阪の守口と門真の2つの市にまたがる広大な地域にパナソニックの本社工場がある。淀川製作所はその周囲をびっしり埋め尽くす住宅街の中にあった。ここだけが、トン、トン、カン、カン、ガチャン、ガチ



淀川製作所本社工場

ヤンと鉄板を打ち抜いたり曲げたりする音を響かせている。以前はあっちもこっちも工場だったが、いつの間にか次々住宅に変わっていたのだという。

小倉社長の祖父は、四国松山で葬祭業を営んでいた人である。父で現会長の義久氏は、その家業が嫌で四国から大阪に出て、1961年、ここで板金業をはじめた。当時の松下電器産業（現パナソニック）の試作品のための板金部品をつくり、やがて農機具や写真現像機などの部品の仕事も手掛けるようになり、順風満帆の時代が続いた。しかし、1999年、小倉さんが社長職を引き継いだ頃から風向きが変わった。元請けからのコストダウン要求は日ごとに激しさを



小倉庸敬社長

増し、やがて工場の海外シフトに伴う受注の激減が下請けを襲った。

大手の下請けの町工場どうしは、お互いに仕事を融通し合い、協力し合ってきた。その仕事仲間から「先行きの見通しが立たないから廃業します」というFAXが次々と入ってくるようになった。その経営者の多くは団塊世代。小倉さんはそれより一回り若い。「みんな心が折れてしまっていた。僕はまだ若い。従業員を路頭に迷わすわけにはいかない。負けてたまるかと思った」という。

元請けの言うなりに仕事をするだけでは、先行きの見通しは立たない。そこで、家電や自動車以外の横方向の展開をめざした。チャンスとみれば、迷うことなく果敢に挑戦した。

たとえば、2000年にはドイツ製のウエルダーマシンの販売代理店を引き受けた。ウエルダーマシンというのはビニールシートを溶着して張り合わせる機械で、テントを張ったりトンネルの防水シートを張り合わ

せるのに使われる。この機械とミシンを合わせて輸入販売していた会社が、ミシンメーカーの撤退でウエルダーマシン販売だけでは成り立たなくなり、その後を淀川製作所が引き受けたのである。2002年には機械設計会社が破綻した後を引き受け機械事業部を創設。2008年には、医薬品の軟膏を練るための混練機の製造をはじめ、さらに、淀川製作所が部品を納入していた「魚を三枚におろす機械」のメーカーの倒産で、それを販売していた会社から頼まれて機械本体の製作を引き受けるようになった。

傘下に取り込んだ事業の市場規模はいずれもさほど大きなものではないが、下請け受注に空いた大きな穴をある程度埋めるのには役立った。同時に、これによって淀川製作所はそれまでの板金技術に加えて機械加工全般の技術と人材を手に入れた。そして、2001年には本社工場の数倍の面積を持つ八雲西町のビルを買い取り、西町工場として、新しい事業の拠点とした。



淀川製作所西町工場

## ■EVはウチでもつくれる

チャンスを広げようとさまざまな異業種交流の場にも顔を出した。「北大阪エコエナジープロジェクト研究会」という産学交流NPOの立ち上げにかかわり、大阪府立工業高等専門学校の先生や学生といっしょに、風力発電設備の開発にもかかわった。これはビジネスにはつながらなかつたが、2009年の春、このNPOが、けいはんな学術研究都市主催の環境フォーラムと交流したとき、小倉さんは京都EV開発の岡田実氏との運命的な出会いを果たした。

「EV（電気自動車）は部品点数がガソリン車の10分の1しかない。だから、中小企業でも容易に参入できますよ」という岡田氏の話を聞いたとき、ひらめくものがあった。淀川製作所は、30年前に松下電器からの注文を受けて電動自転車の試作品をつくったことがあったから、EVもウチでやれるのではないかと思った。さらに岡田氏の紹介で、先発の富山のEVメーカー、タカオカ自動車工芸を訪ねたとき、もともと看板屋だったというこの会社の設備を見て「これならウチもやれる」と確信した。

EVそのものは、新しい発明でも何でもない。遊園地に行けば子供でも乗っている。ありきたりのつくり方では、コスト面で中国製品や韓国製品にかなうはずがない。その中でみんなの注目を集めるには、コンセプトが重要になる。「それなら『メ

イド・イン・ジャパン』ではなく、『メイド・イン・日本』でいきたい。日本人として誇りが持てるものをつくりたい」と小倉さんは考えた。小倉さんのその思いを形にしてくれるよう九創設計室のデザイナー、後藤美香さんに依頼し、そして後藤さんが提案してくれたデザインが、真っ赤な漆塗りのボディ、扇型の扉、御所車のような純和風のデザインだった。



“Meguru” イメージ図

シャーシーの前にバイクの前輪をとりつけ、後ろが2輪の3輪車で3人乗り。その上に御所車のようなボディを載せ、時速40キロで走らせる。扇型の扉がついているものの車内は密閉されておらず、夏は暑く、冬は冷たい空気がそのまま入ってくる。四季折々の風を直接肌に感じながら、これで京都や奈良の観光地をゆっくりと走ってもらおうというコンセプトだ。これこそ完全な意味でのエコカーといえた。そこから「環境」の「環」の字をとって“Meguru”と名付けられた。

やがて、いまならその開発に、大阪府の地場産業活性化プロジェクトの助成金がもらえるかもしれないという情報が入ってきた。助成金の申請は、その年の9月末日まで。かかった費用の半分で、上限100万円まで出る。助成金を最大限活用して、コストミニマムを追求すれば、総予算200万円でつくればよいということになる。

ただし、4社以上による共同開発が条件というので、小倉さんのはかに、京都EV開発の岡田さん、九創設計室の後藤さん、そして、助成金の情報を教えてくれたNPOの仲間の近畿刃物工業社長の阿形清信さんを加えた4人で「あっぱれ！EVプロジェクト」を結成し、9月末日に助成金を申請。10月初めに許可が下りた。



「あっぱれ！EVプロジェクト」の4人のメンバー

## ■EV開発奮闘記

このころの淀川製作所は、前年の下請けの仕事の激減で国からの緊急融資を受け、それによって従業員に賃金を支払っていたが、仕事量は十分ではなかった。そこで余



“Meguru” 製造工程

った労働力を「あっぱれ！EVプロジェクト」に投入したのである。

開発期間は2010年3月末日が締め切り。わずか半年しかない。それまでに完成させないと助成金の話はふいになる。そのうえ大変だったのは、“Meguru”には後藤さんの描いたイメージ図があるだけで、設計図がなかったことだ。

イメージ図をもとに現場で寸法を割り出し、鉄材を加工し、必要な部品を調達して組み立て、内装や扇の扉やボディの塗塗りは外注に出す。実際に仕事をはじめてみると、イメージ図どおりにすすまず、調整の必要な箇所が山のように出てきた。調達してきたバイクの前輪が小さすぎたり、ボディの天井が低すぎて、後部座席に人が座ると頭が天井より上に出てしまったり、イメージ図にある正方形のヘッドライトがなかなか見つけられず、長方形のもので間に合わせようすると後藤さんからクレームがついたり…等々、トラブルの連続だった。

期限までの時間に追われながら、男たちは、つくる側の都合からしばしばデザイン

を変更しようとした。が、後藤さんは一切それを認めず、美しくない、かわいくないと思った部分は遠慮なく指摘してつくり直させた。締め切りまでの時間のプレッシャーをいつも感じていた男たちは、何度も「なんでやねん、なんでそんな細かいことまで」と反発した。しかし、かたくなとも思える後藤さんの一貫した姿勢を、最終的には小倉さんが「姫がそうおっしゃっているんや。しょうがないやないか」と支持した。このプロジェクトは、何よりもデザインが最優先だったからである。もしも男たちの要求を容れて、機能をデザインに優先させていれば優雅で個性的な“Meguru”は誕生していなかった。

2010年3月31日の締め切り間際まで、すったもんだしながら“Meguru”はようやく完成した。小倉さんの著書「町工場のおやじ、電気自動車に挑む—あっぱれ！EVプロジェクト奮闘記—」(組立通信刊)には、小倉さんの話を聞き書きしたライターによって軽妙な大阪弁を交えて、その過程の人間模様がいきいきと綴られている。



完成した“Meguru”

## ■日本はモノづくりの国やろ？

もうひとつ特筆すべきことは、「あっぱれ！EVプロジェクト」のことを知ったテレビ局が、淀川製作所にずっと張り付いて密着取材し続けたことである。小倉さんと社員たちの、締め切りを気にしながらの設計図もない試行錯誤の日々は、ずっとテレビカメラによって追われていた。

「カメラをプレッシャーに感じたのは最初だけです。後は気にならなくなったり」と小倉さんは言う。「それよりも、このテレビを見て、大阪で頑張っているおっさんがおるらしい。自分らも頑張らなあかんと思うってくれたらええ。それでこそ地場産業活性化の起爆剤になれるのやと思うたんです」

小倉さんの話を聞くうちに、この人が“Meguru”をつくったのは、ただ下請けからの脱出のためだけではなさそうに思えてきた。そのオープンで前向きな生き方が、いったいどこから来ているのか。最後にそれをきいてみた。小倉さんの答えはこうだ。

「20～30代の頃は、男は甲斐性や、稼げる男が偉いんやと思うてました。しかし、娘が3歳で白血病になって生死の瀬戸際を経験したとき、必死になって看病する女房の姿に、母親の力の凄さを見たような気がしたんです。それに比べると男というのは、何とひ弱なものか。ちょっとばかり稼いでいい気になっている男は、ちっちゃな愚かなものやと思えてきたのです。そのと

きから、僕も頑張って仕事で世間に奉仕するしかないと思うようになりました。我々のこの国はすごい国ですよ。外国へ行ってあらためて日本を見直すと、この国の豊かさ、奥行きの深さを感じる。せやのに、みんな『もうあかん、もうあかん』と言いすぎる。製造業はもうあかんと言う。本当にそうか？　日本はモノづくりの国やろ。みんなもっと頑張ろうや、僕は日本中にそう言いたくて、"Meguru"をつくったんです」

いま、淀川製作所では、大阪府立工業高等専門学校の学生たちに図面を描いてもらいうながら、4台の市販用の"Meguru"を製造中。その最初の1台は36歳のフリーライター、中林朗夫さんが購入することが決まっていて、彼が来春からそれで日本を一



周し、"Meguru"と彼自身の故郷、大牟田の観光PRをして回る。その紀行をもとに「あっぱれ！EVプロジェクト奮闘記・パート2」を出版する計画だという。

取材・執筆 山口 幸正（やまぐち ゆきまさ）

#### 《プロフィール》

外資系食品製造業人事部勤務の後、産業教材出版業勤務。全国提案実績調査を担当し、改善提案教育誌を創刊。1985年に独立し創意社を設立、「絵で見る創意くふう事典」「提案制度の現状と今後の動向」「提案力を10倍アップする発想法演習」「提案審査表彰基準集」「改善審査表彰基準集」「オフィス改善事例集」などの独自教材を編集出版。30年以上にわたって企業の改善活動を取材してきた経験と実績を活かし、現在はフリーライターとして幅広く活躍。

●創意社ホームページ <http://www.eonet.ne.jp/~souisha/> 「絵で見る創意くふう事典」をネット公開中